

牛がつなぐ福祉と畜産の里

～牛づくりは人づくり～

社会福祉法人恩和会 授産施設 のうこうえんせんりたい 農工園千里平

【授産施設 農工園千里平】

農工園千里平は、知的障害者の就労や技能修得のため、大家畜の飼育を通じて職業訓練を行っている授産施設である。



1．施設の設立経緯

(1) 農工園千里平の設立者で元園長でもある坂本嘉隆氏は、昭和21年に北海道から現在地に入植し、懸命な努力により水田8㌥を耕作する篤農家となった。氏は、言語障害を持つ長女が県立七戸養護学校高等部を卒業しても働き場のない状況を痛感し、同じ境遇に置かれている親子のため、私財を提供して、妻と2人で昭和58年に在宅障害者の働き場となる施設建設に着手した。

(2) 昭和62年4月に社会福祉法人として認可を受けて以来、農作業を通じた知的障害者の授産施設として15歳以上の園生を受け入れしており、開設当初の2名から始まった当施設も今や38名の園生が近くにある福祉ホームや自宅から通園している。

現在、園長のほか11名の職員が知的障害者の生活や農作業等の作業指導に献身的に当たっている。

2．肉用牛による園生の作業訓練

(1) 園生は、農作業や多岐にわたる園内外での活動を通じて日常生活に必要な知識と技能を身に付け、自立した生活ができるよう社会参加を目指して訓練を行っている。

農作業については、黒毛和牛の飼育を中心とする畜産班のほか、水稻班、環境整備をする家

庭科班に別れている。

また、園内の共同生活の中で掃除、洗濯、あとかたづけ等身の回りのことを自ら行うことや、近隣農家への作業協力、畜産共進会等への肉牛出品と見学、ほぼ毎月開催されるレクレーション、地域交流会等に取り組んでいる。

これら一連の活動は、園の運営方針並びに指導目標として「知恵は遅れていても、立派な人間に」「生かされた人間ではなく、自ら生きる人間に」を園生が自らの実践を通じて体得させることを目指したものである。

(2) 特に畜産班は和牛1班から4班まであり、園生にとって牛の飼育担当になることが憧れとなっており、園生は自ら進んで長時間の牛体ブラッシングを行う等、牛の管理に喜びを感じている。このような愛情を持って牛に接することにより、牛が非常に穏やかで人によく馴れている。その牛が販売された時大いに悲しむが、再び新しい牛を与えられて生き生きとしてその牛の管理に夢中になること、共進会でチャンピオン賞を取った時に両手を上げて大きな喜びを表す様など、園生達がこれらの活動に積極的に参加し、自らの意志で目標に向かって努力している。

園生のこれらの貴重な経験は、広々とした農場の中での穏やかな農作業、とりわけ、牛の飼育は手間を掛ける程牛が人になつくという形で園生に返ってくることなど、知的障害者にとって心地良い環境が与えられていること、さらに、園長を始めとする全員の指導者が障害者の可能性を信じ、障害者の立場に立ち、我慢強く対応していること等により実現するものと推察される。

3. 成果

(1) 優良牛生産の実証

施設では県内の先進農家にも比肩する優良牛を生産しているが、これは市内の肉用牛飼養篤農家による指導と、職員等のたゆまない熱心な研究心によるものであるのは言うまでもない。しかしながら、さらに加えて見逃せない点としては、園生の「牛とのスキンシップ」とも取れるほどの毎日の丁寧な飼育管理により、ストレスの軽減からくる順調な発育や肥育が期待され、牛が人間や環境によく馴れて生来持っている資質や能力を十分に発揮しているものと考えられることである。その結果、県内外の和牛共進会及び枝肉共励会においても数々の上位入賞につながっている。

(2) アニマルセラピー効果

園生が肉牛の飼育に夢中となり、それにより牛が人に懐くこと、その牛が共進会で入賞するたび牛の管理に喜びを感じ自ら積極的に作業することなど、アニマルセラピー効果のあることが推測される。またこのことが、牛にとっても障害者のスキンシップとも取れるほどの飼育管理は快適なものであり、家畜としての能力を十分発揮させるための効果を生み出しているもの

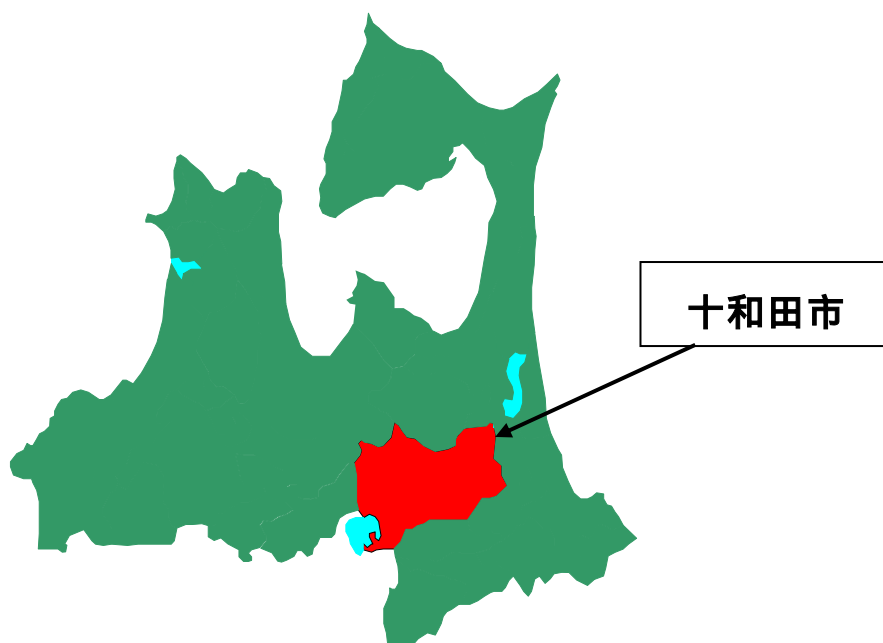
と推察する。

(3) 授産施設での肉用牛飼育の展示

授産施設での家畜飼養は中小家畜が一般的であり肉用牛は稀であるが、当施設での肉用牛飼育は非常に有効であることが実証されており、かつ地域畜産振興にも寄与している。このことは他の多くの授産施設に対し多いに参考になるものと考えられる。

1 地域の概況

十和田市は青森県の東南中央部に位置し、面積は 68,860ha であり、東方には三本木台地が広がり、十和田湖を源とする奥入瀬川、稲生川など多数の河川が台地を横断し太平洋へと流れ、西方には十和田八幡平国立公園に含まれている奥羽山脈の八甲田山系や十和田山等の多くの山地を有するとともに、国の特別名勝の「十和田湖」と天然記念物に指名されている「奥入瀬渓流」がある。



気候は平均気温 9.4 、年間降水量 960 mm と冷涼型で四季がはっきりしているが、春の終わりから夏にかけてヤマセ（偏東風）が吹き、平常よりも 5～6 も低い低温が続く、農作物に大きな被害を受けることがある。

農作物作付け延べ面積は 11,200ha で、うち水稻 4,790ha、飼料作物等 3,940ha、野菜 1,070ha となっており、にんにく、そばが県内 1 位、小麦、大豆が県内 3 位の作付けとなっている。

家畜の飼養状況は、肉用牛が 11,800 頭、豚が 73,500 頭で県内 1 位、採卵鶏 454 千羽で県内 3 位の規模となっている。

農業産出額は 174.6 億円で、このうち畜産が 64.4 億円（39%）、野菜が 54.2 億円（31%）、米が 46.6 億円（27%）を占める。また、畜産産出額のうち豚が 40.8 億円、肉用牛が 16 億円でともに県内 1 位であり、本県を代表する畜産地域となっている。

表1 作付面積の概要(H18)

(単位:ha、%)

区 分	作付 延べ面積	稲	麦類	雑穀	豆類	野菜	飼肥料 作物	その他
青森県	137,600	53,300	2,120	2,840	4,760	18,500	28,200	27,880
十和田市	11,200	4,790	273	464	384	1,070	3,940	279
十和田市 / 県	8.1	9.0	12.9	16.3	8.1	5.8	14.0	1.0

表2 家畜飼養頭数(H19)

(単位:戸、頭、千羽)

区 分	乳用牛		肉用牛		豚		採卵鶏	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	羽数
青森県	311	15,800	1,330	60,100	182	386,400	38	6,088
十和田市	25	750	313	11,800	39	73,500	3	454
十和田市 / 県	8.0	4.7	23.5	19.6	21.4	19.0	7.9	7.5

表3 農業産出額の概要(H18)

(単位:億円、%)

区 分	合計	米	野菜	畜産				その他
					肉用牛	豚	その他	
青森県	2,885	589	653	704	81	214	409	939
十和田市	174.6	46.6	54.2	64.4	16.0	40.8	7.6	9.4
十和田市 / 県	6.1	7.9	8.3	9.1	19.8	19.1	1.9	1.0

表 1 ～ 3 は第 5 4 次農林水産統計年報より抜粋

2 地域畜産振興活動の内容

(1) 地域畜産振興につながる活動・取り組みの具体的な内容

【全般】

障害者を対象に「農」を中心とした生活訓練、職業訓練による自立、社会参加を目的に社会福祉事業を実施している中で、肉用牛という大型の家畜を飼育し、その繁殖、育成、肥育という一連の作業を取り入れている。

また、子牛、種畜の売却や肥育牛の出荷を事業活動としており20年以上継続している。「農作業部門」の中には稲作、育苗、畑作、粗飼料生産も展開され、家畜の堆きゅう肥の草地還元、地域での稲わらと堆肥交換をしながら資源循環型農業も目指している。

【稲作部門】

自給分の米を生産するほか、地域農家からの委託を受け育苗や苗の販売もしている。

最近では減反制度の切り替え等で育苗枚数が減ってきているものの、廉価で質が良いとの評価を貰っている。



【肉用牛飼育部門】

肉用牛の飼育が、主な事業活動となっている。当初1頭の寄贈から始まったが、現在の飼養規模は地域としても比較的に大きく、繁殖牛78頭、肥育牛13頭、子・育成牛44頭の計135頭となっている。畜産班は和牛1班から4班（各7名）に分かれるほど希望者が多く、毎日の作業に熱心に取り組んでいる。

牛は自家生産の他外部導入も行っており、血統、体型的に優れている。

施設での生産牛は、性格温和で飼いやすく地域の模範となっている。その理由としては、一日中でも牛のブラッシングをするなど牛の担当になった園生が愛情を一心に込め飼育しているためと考えられる。

前園長、坂本嘉隆氏の長年の経験から積み上げた言葉を借りると「園生とのふれあいで牛の気持ちが優しくなりいい性格、肉質に育つ。アニマルセラピーという言葉の中には、牛によって人が安らぐだけでなく、人によって牛が安らぐという側面もある事を体現している。牛を飼い始めてから園生が笑顔を絶やさなくなった。また、担当の牛を持たせてもらえる事があこがれであり、担当を決め世話をすることで責任感が生まれる。牛に愛情を与えると牛から愛情が返ってくることを、牛が園生に非常によくなつく事で実感している。」とのことである。



そんなところから、
「牛づくりは人づくり」
という農工園のモットーが生まれた。

施設や設備だけではない究極のアニマルウェルフェアと言えるかも知れない。

共進会や枝肉出荷、共励会へ積極的に出品しており、その結果が園生の励み、自信となっている。その他の主な取組としては、牛舎は電柱などの廃材を使った自家労力による低コスト畜舎の建築、水田（1ha×4区）放牧による労働力削減と農山村の景観保持、調教と触れあいを兼ねた「牛の散歩」なども行っている。

【地域交流】

近隣農家との作業協力だけでなく、社会参加として夕涼み会、カラオケ発表会、クリスマス会やお茶会を実施している。

芝生、植栽等を環境整備し園内のレクリエーションだけでなく、老人クラブや学童のキャンプ場として開放しており、中高年ボランティアスクールや保育所、体育振興会へも場所を提供している。

毎年、十和田市民と障害者の集い「ゆめ色フェスティバル」(障害者が行う学芸会のようなもの)を開催。千人近くが集まり、障害者も市民も一緒になって寸劇や餅つき大会などを楽しんでいる。



【生活訓練】

肉用牛飼育部門、水稲部門の他に家庭科部門を設置し、共同生活の中で、掃除、洗濯、調理、後かたづけに取り組んでいる。

【スポーツ】

園生の体力増進とレクリエーションを兼ねてフリスビー、ソフトボールチームをつくり、大会に参加している。また、レクリエーションとしてボーリング大会も開催している。

【特記事項】

事業全体としては、大型家畜である肉用牛の飼育を中心的な事業活動としており、同様な社会福祉施設としては希有な事例であると思われる。

(2) 当該事例の活動目的と背景

【動機：農工園 千里平設立の経緯】

- ・北海道から昭和 21 年に入植した前園長の坂本嘉隆氏は、は 8 ヘクタールの水田を耕作する稲作農家であったが、未熟児で産まれた長女が言語障害をもち、自立、就職などで大変苦労をしたことから施設の設立を決意した。
- ・昭和 59 年に住宅、倉庫、作業所、ビニールハウス、畜舎等を整備し、15 歳以上の知的障害者を受け入れるミニ授産施設を、およそ 7 千万円の私財を投入してスタートし、設立主体は「十和田地区手をつなぐ親の会」で当初は園生 2 名だった。
- ・千里平という名前は「千里の道も一歩から」という思いが込められ命名された。
- ・昭和 62 年 4 月に社会福祉法人の認可を受け、法人化に伴う主体施設は「恩和会」で、定員が一挙に 20 名となった。

(活動目的)

- ・知的障害者は「何もできないのではなく何もさせてもらえない」のが現状で、養護学校卒業後に働く場所を提供し、職業訓練と生活訓練により農作業を通じた自立と社会参加を狙いとしている。

【肉用牛飼育の開始】

- ・初めは園生が水稻、芝生生産、実験用モルモットの飼育などを行っていた。
- ・県の主催する農業経営者会議に前園長の坂本氏が出席した際、「牛好き」という縁で出会った十和田市の畜産農家福沢常次郎氏から、昭和 62 年に「園生にぜひ牛も飼わせたい」という意向で黒毛和牛の雄子牛 1 頭の寄贈をうけた。
- ・福沢氏の指導のもと園生とともに飼育し、2 年後同市の肥育共励会で優秀賞を獲得し 100 万円で販売したことが園生の励みになった。飼育していく過程で園生達の動物への愛情が牛、人双方に良い影響を与えるものと確信し、積極的に優良牛の導入を始め、専門指導員も配属しながら肉用牛飼育事業を拡張していった。その中で特記すべきは平成 11 年に丁寧な牛の飼育が評価され、島根県より雌牛「福桜一の六」を特別に導入し、平成 12 年に宮崎県から種雄牛「安平」系の雌牛を購入した事があげられる。
- ・牛のことはほぼ 0 からのスタートであり、近接地で同様な施設での類似事例は無かったため、福沢氏から指導を受けるとともに、専門指導員らが市場や共進会、研修会に足を運び勉強を続けている。

(3) 活動の成果

【肉用牛作業等を通じた社会参加】

・食肉加工関連会社へ園生が就労するなど社会参加がみられ、施設で養った真面目な勤務態度は高く評価されている。また、地域との関わりの中で、「ゆめ色フェスティバル」という大きなイベントの開催や、老人クラブやボランティアグループとの交流も活発に行われているほか、県内外のソフトボール大会でも目覚ましい成績を残している。

< ソフトボールにおける功績 >

県大会 優勝 4 回

北海道・東北ブロック大会 優勝 3 回、準優勝 3 回

全国大会 出場 5 回 優勝 1 回、3 位 2 回

【アニマルセラピー】

牛によって人が安らぎ、人によって牛が安らぐという双方向のアニマルセラピーが成立し、牛は温和で飼い易く、当該施設での大規模家畜の飼育を可能としている。

【資源循環】

堆きゅう肥の草地還元や、近隣農家との稲わら交換により 牛 — 畑 — 田圃 間に資源が循環され、環境に優しい農業が実践されている。

【優良な肉用牛の生産】

・現在、繁殖牛 78 頭と子・育成牛 44 頭、肥育牛 13 頭の計 135 頭が飼養され、地域でも大規模和牛経営である。生産者は県共進会や枝肉共励会などで上位入賞を果たしているほか、県試験場の供卵牛に選抜されるなど優良牛を生産しており、家畜市場販売を通じて地域畜産振興に寄与している。

・最初の子牛は飼育開始から 2 年後に十和田市の共進会で優秀賞に選ばれる等、以下の様な好成績を示している（抜粋）。



< 品評会部門 >

年 月	共 進 会 名	成 績
平成 2 年 9 月	第 29 回青森県畜産共進会	チャンピオン、優秀賞
平成 2 年 9 月	東日本和牛能力共進会福島大会	出場
平成 3 年 8 月	第 30 回青森県畜産共進会	チャンピオン 2
平成 5 年 8 月	第 32 回青森県畜産共進会	優秀賞

平成 6 年 8 月	第 33 回青森県畜産共進会	1 等賞 2
平成 7 年 9 月	第 34 回青森県畜産共進会	チャンピオン、優秀賞
平成 8 年 9 月	第 35 回青森県畜産共進会	優秀賞、1 等賞 2
平成 9 年 9 月	第 36 回青森県畜産共進会	優秀賞 2
平成 11 年 9 月	第 38 回青森県畜産共進会	チャンピオン(東北農政局長賞、県知事賞)
平成 13 年 9 月	青森県和牛共進会	グランドチャンピオン(農林水産大臣賞、東北農政局長賞) 高等登録チャンピオン、県知事賞
平成 16 年 9 月	青森県肉用牛共進会	チャンピオン(東北農政局長賞、県知事賞)、優秀賞
平成 17 年 9 月	青森県肉用牛共進会	優良賞
平成 18 年 9 月	青森県肉用牛共進会	優良賞 3
平成 19 年 9 月	青森県肉用牛共進会	優良賞
平成 20 年 9 月	青森県肉用牛共進会	優良賞

< 共励会・枝肉出荷部門 >

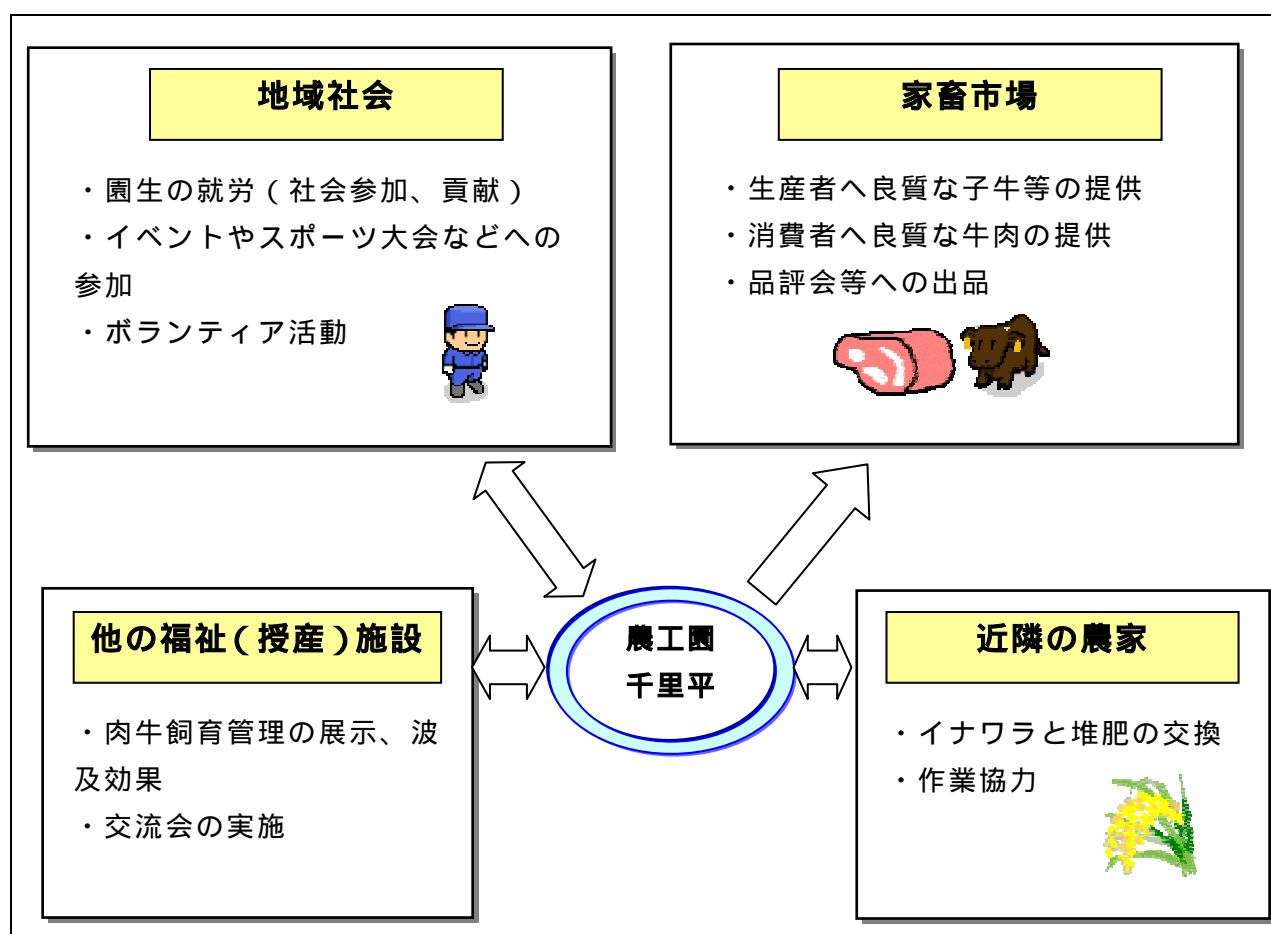
年 月	区 分	結 果
昭和 62 年 2 月	枝肉出荷(初出荷)	A - 5
昭和 62 年 7 月	枝肉出荷	A - 5
昭和 62 年 10 月	枝肉出荷	A - 5
昭和 63 年 5 月	枝肉出荷	A - 5
昭和 63 年 8 月	枝肉出荷	A - 4
平成元年 7 月	枝肉出荷	A - 5
平成 2 年 7 月	枝肉出荷	A - 5 2 頭
平成 3 年 6 月	枝肉出荷	A - 5
平成 4 年 12 月	仙台中央卸売食肉市場 枝肉共励会	チャンピオン賞 優秀賞
平成 5 年 1 月	仙台中央卸売食肉市場 枝肉共励会	チャンピオン賞 優勝賞 2
平成 5 年 11 月	第 25 回青森県肥育肉用牛共進会 * 農林水産祭式典参加	農林水産大臣賞 * 明治神宮会館へ 11 名参加
平成 5 年 12 月	仙台中央卸売食肉市場 枝肉共励会	A - 5

平成 6 年 8 ~ 10 月	枝肉出荷	A - 5 1 頭 A - 3 3 頭
平成 8 年 9 月	枝肉出荷（初出荷）	銀賞
平成 8 年 12 月	第 29 回青森県肥育肉用牛共進会	優秀賞
平成 9 年 12 月	第 30 回青森県肥育肉用牛共進会	最優秀賞
平成 11 年 11 月	枝肉出荷	A - 5
平成 11 年 12 月	枝肉出荷	A - 4
平成 11 年 12 月	第 32 回青森県肥育肉用牛共進会	A - 4
平成 12 年 9 月	枝肉出荷	A - 5 , B - 4
平成 12 年 12 月	枝肉出荷	A - 4
平成 16 年 12 月	県肉用牛枝肉共進会	A - 4

【園生による飼いやすい牛づくり】

毎日の愛情牛との触れあい、特に丁寧なブラッシングは牛を温和にし、よく人に懐いている。このような牛が高く評価されるという事が、園生の楽しみ、生きがい、自信につながっており、これら地域の肉牛農家からも高く評価されている。

(4) 地域振興図



(5) 今後の課題

【社会参加】

- ・ 職業訓練を積んでも、就労先の確保が困難な状況にある。地域の企業に継続して働きかけていく。
- ・ 「インターンシップ制度（障害者版）」のようなものがあれば、障害者に対する社会の理解がすすむものと思われる。
- ・ 園生の高齢化が進んでいるため、今後はグループホームとして、老後も共同生活が出来る体制をつくっていく必要がある。

【肉用牛飼育及び農作業部門】

- ・ 子牛や枝肉の価格変動に左右されない繁殖肥育一貫生産を強化するため、肥育技術の向上が課題である。
- ・ 農業機械を使用する大規模化は困難なため品質の向上で生産性の向上を図っていく。

3 当該事例の活動・成果の普及推進のポイント

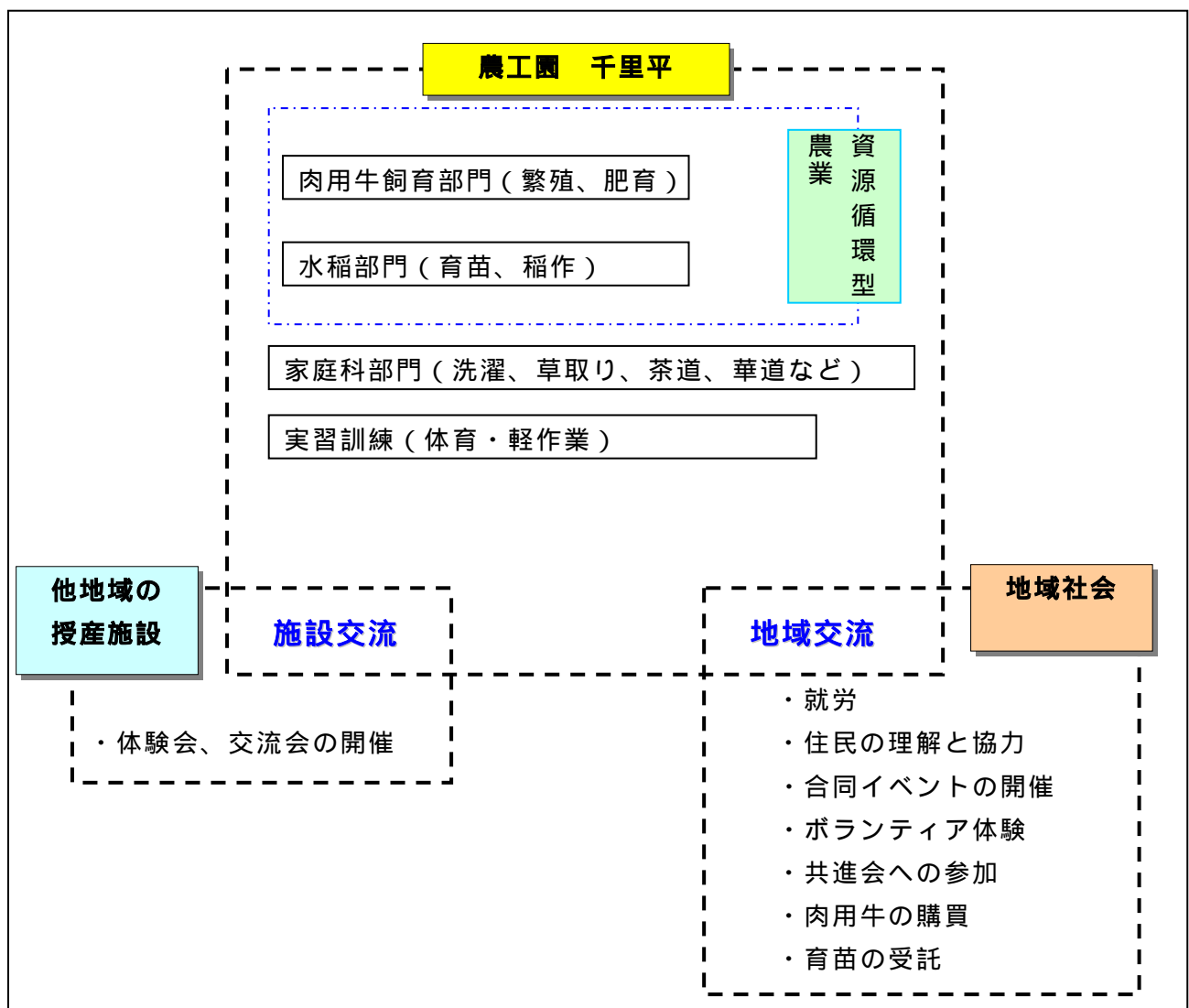
(1) 普及にあたっての留意点

同様施設における当該事例の普及に当たっては、農工園千里平の取組内容と成果を考慮すると、次の2点が重要と考える。

1) アニマルセラピー効果を期待できるような施設づくりが必要であり、そのためには障害者の心に受け入れられるような穏やかな飼育管理のできる施設、職員体制が不可欠と考える。

2) 核となる肉用牛の飼育技術と併せて知的障害者を理解し、我慢強く対応できる職員の確保が重要と考える。

(2) 実施体制図



活動の年次別推移

年 次	活動の内容等	成果	課題・問題点等
昭和 58 年	小規模授産施設として発足	園生 2 名が入園 育苗、モルモットの飼育等開始	モルモットの飼育がうまくいかず中止する。
昭和 62 年	農工園千里平開園 社会福祉法人として認定される 肉牛の飼養に取り組む	雄子牛 1 頭の飼育からスタート	
昭和 64 年	十和田地域の共進会への初出品。 畜産指導員を設置する。	優秀賞に入選 その後、数々の入賞を獲得	受精卵移植等の畜産技術が必要となる
平成 10 年	地域のソフトボール大会に参加を始める。	県大会優勝 4 回ほか全国大会へも出場	
平成 11 年	種雄牛を導入		
平成 15 年	福祉ホームとわださんまり荘開設	宿泊施設として園生が利用	入居者の高齢化が進む。

活動に対する受益者等の声（評価・意見）等

氏名	所属・属性	声（評価）
野々宮 明正	十和田ミート 代表取締役	（園児就職先） 1 2名の園生が20年近く勤務しているが、ほとんど休まず、かつ無遅刻で出勤し、勤務態度も非常にまじめである。また、作業を熟知しているため、手際良く正確に業務をこなし、必要な人材となっていることから、今後も継続して雇用していきたい。 2 社会の一員として施設外で仕事をこなしていること、対価として給与をもらっていること等に対し、刺激とやりがいを感じているようである。また、社内行事にも積極的に参加し、溶け込んでいる。 3 現雇用園生のような人材であれば、受入人員を拡大しても良いと考えている。雇用を判断するきっかけとして、就業体験的なところを社会で後押しするような仕組みがあれば、雇用の機会が拡大すると思う。
豊川和男	十和田おいらせ農業協同組合職員	牛は体型的にも優れていてよく調教されている。地域や県の共進会等の話を持ちかけると、とても意欲的に参加し優秀な成績を収めるので、地域の畜産振興に大きく貢献している。
平泉真吾	農林総研畜産試験場研究員	農工園の牛が血統、体型が良いので供卵牛として購入し、試験牛として採卵を繰り返したが、非常に穏和で、ホルモン注射や採血もし易く、調教されているためか移動も簡単で大変良かった。